

# 『基礎日本語会話』の反省と 初級会話教材のあり方

田 辺 和 子

## はじめに

筑波大学の文部省予備課程研究留学生のための六ヶ月間の日本語研修コース（Aコース）では、現在、本学の留学生教育センター作成の『基礎日本語会話Ⅰ・Ⅱ』を教科書として使用している。しかし、この教科書は、元来は、本学の教員研修留学生用の会話練習補助教材として作成されたものであり、話題・場面・語彙等の面で、Aコースの学生に必ずしも適したものとは言えない。また、シラバスは、教員研修留学生が主教材として使用していた海外技術者研修協会編『日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』に全面的に依っていて、Aコースの学生にとって適切なシラバスかどうかという検討は、なされないまま使用されている。そこで、本稿では、『基礎日本語会話Ⅰ・Ⅱ』の分析を基に、Aコースの学生を対象とした初級会話教材のあり方を考えてみたいと思う。

## Ⅰ. 従来の初級会話教材の傾向

近年、日本語教材の初級教材は、数多く出版され、内容も充実してきている。それらの教材は、必ず会話文を入れているが、しかし、それらは、会話とはいっても、文法的な見地から整理された基本文型の提示を主目的としたものである。そして、このグラマティカルシラバスによった教科書の学習項目は、大体形態的に同類のグループごとにまとめられている。『日本語の基礎』によると、例えば、動詞の「て形」に接続する補助動詞（～である、～てみる、～ている（状態））を連続した課で提示したり、よう／そう／らしいの助動詞を同一課で練習したりしなければならないようになってきている。（注1）

このようなグラマティカルシラバスに対して、学習者の遭遇するであろう場面を想定して構成を考えるシチュエーション（Situational）シラバスがあるが、これは、対象とする学習者によって教科書の様相も大きく異なり、シラバスの内容そのものの一般化は無理である。このシチュエーションシラバスの特長は、提示される表現の選択は、実生活の中で、必要性の高い、目的の明確なものという基準でなされている点である。（注2）

本稿では、『基礎日本語会話』の反省という意味から、グラマティカルシラバスによる会話力養成の効果を問い直してみたい。

## Ⅱ. 「基礎日本語会話の分析方法」

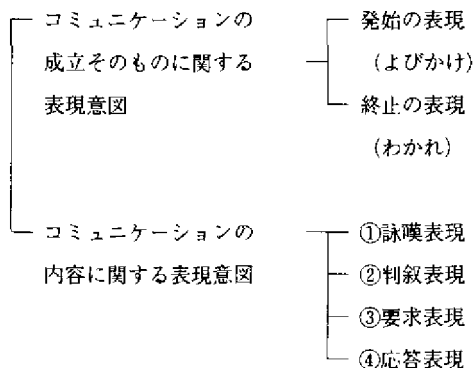
### Ⅱ-1 分析項目の設定

「基礎日本語会話」を考察するために、次の項目に添って分析表を作成した。

- ①場所…会話が行われている所
- ②話題…何について話しているか
- ③対人関係…作成時には、主人公を特に設定しなかったが、分析に際して、学習者が自己投影しやすい主たる人物が誰と話しているかはっきりさせることが大切だと思い、その相手を、主人公の立場から対〇〇と示した
- ④文法・文型…この教科書の中心となった文法的骨組み
- ⑤文型内機能
- ⑥対話機能
- ⑦会話の開始と終了の形式
- ⑧練習すべき応答表現

⑤⑥⑦⑧については、次のように定めた。

まず、宮地裕氏は、「話しことばの文型Ⅰ」（国立国語研究所，1960）において、表現意図を次のように説明している。（注3）



前出の⑤の「文型内機能」というのは、「表現そのものによって示される一般的な表現意図」（国研，1960，P.4）で、例えば、「この部屋は、寒いですね。」という発話の機能を誰と話しているかとか、この発話に至るまでの脈絡を考慮に入れずに、叙述機能を定め

ていることである。このような機能分類の対象となるものは、宮地氏の分類によれば、コミュニケーションの内容に関する表現意図(①～④)に当たる。ただし、本稿では、分類基準は、別に定めた。(後述)ここで、「表現意図」という語を使わずに「機能」という語を置き換えた理由は、前者は、話し手側だけからの発想を対象とした印象が強いからである。話し手は、何らかの意図に基づいて発話するわけだが、その意図が聞き手側にも理解されて始めて、コミュニケーションが成立し、話しが発展していくと考える。そこでここでは、文法・文型で提示された表現を使って言葉を交わすことによってどんな言語的効果が達成されたのかという観点から「機能」という用語を使うことにした。

「文型内機能」に対し、⑥対話機能というのは、「臨時的表現意図」(国研,1960,P.4)に当たるもので、これは、必ずしも一定の機能に固定化できるものではない。場面によって同じ文法・文型でも数々の対話機能がある。前に上げた「この部屋は、寒いですね。」という発話も、対話機能としては、「窓を閉めてくれ。」とか「ストーブをつけてくれ。」とか要求する機能を持っていることになる。

⑦話の開始と終了の形式は、宮地氏の分類によれば、コミュニケーションの成立そのものに関する表現意図に当たる。ここでは、全部の会話の始まりと終わりを網羅的に見て、その多様性を問うことにする。

⑧練習すべき応答表現の項目では、コミュニケーションを円滑に進める上で特に有効だと思われる応答表現をとり出してみた。応答表現に関しては、作成前に、何をどのように会話教材の中に組み入れるか検討されていなかった。そこで、有益な応答表現がどの程度入っているか事実を把握し、その用法についての妥当性を考察してみたい。

## II-2 文型内機能と対話機能の判定基準について

Van EK (Waystage English, 1980) が、コミュニケーションの機能を六つに分類しているものを参考にし、(注4)四つに大きくまとめた。

- a. 事実を伝達する機能  
(状況描写, 報道)
- b. 知的判断を示す機能  
(判断, 評価, 議論, 比較)
- c. 感情を表す機能  
(喜び, 困惑, 希望, 意志)
- d. 他人へ働きかけをする機能

(命令, 依頼, 勧誘)

表3の分析表の文型内機能の欄の記号は、その課の文法・文型が該当する機能の記号である。宮地氏の分類と異なる点は、宮地氏の②の判叙の表現を二つに分割し、a. 事実を誤りなく伝える機能、b. 知的活動の表現を伝える機能としたことと、④の応答表現を除外したことである。その理由は、判叙を完全に分けることが不可能だとしても、事実のありのままを伝えようとする言語活動と自分の価値判断を表明する活動との大体の比率を把握したいと思ったためである。また、④の応答表現を除外した理由は、応答表現は、宮地氏の分類の①/②/③それぞれを受けて出てくるもので、①②③と並立するものではないと考えたからである。この応答表現によって、むしろ、コミュニケーションが途絶えたり、発展したりするのであるから、コミュニケーションの内容というよりも「コミュニケーションの成立そのものに関する表現意図」に近いと考えた。そこで、分析表では、独立した項目を作った。

(→ p. 2 ⑧参照)

表3の分析表の対話機能の欄の記号は、さきほど文型内機能を考えたのと同じ文法・文型が、今度は、実際の会話文中では、どの機能を負っているか考えたものである。具体例で示すと次のようになる。

<会話>設定

- ①場所…保健センターの窓口
- ②話題…診察時間
- ③対人関係…対保健センターの人
- ④文法・文型…「～は、～時からです。」

<会話>

ハリム：「すみません。診察お願いしたいんですが。」

センターの人：「診察は、午後1時からです。」

以上のようなやり取りがあったとすると、「～は、～時からです。」は単独の意味は、時間の通告であるから、文型内機能は、a. 事実伝達であるが、この会話文中では、「今は、診察を受けられない。」というb. 知的判断の表示と解釈でき、対話機能は、b. となる。もし、仮に「診察時間は、午後1時からです。」という同じ表現が、「診察時間は、何時からですか。」という電話の問い合わせに対する答えだとしたら、「～は、～時から

です。」は文型内機能も対話機能も、a. 事実伝達になる。

文型内機能及び対話機能の判別は、a～dの四機能が相互に関連しているので、完全には無理だが、対話機能を考える手段としては、次のような手順を取ってみた。まず、b c dをさらに2つから3つの主要な要素に分割し、その機能を簡単な日本語に言い換え、その課の学習項目である新出文法・文型の直後に埋め込んでみた。先に上げた会話例では、次のようになる。

ハリム：「すみません。診察お願いしたいんですが。」

センターの人：「診察時間は、午後1時からです。」

→（今は、だめですよ。）

→印の部分が、埋め込んだ部分である。この作業の目的は、新出文法・文型の会話文中の含意を引き出すことである。特に、文型内機能がa. 事実伝達の場合、会話文中でどのように運用されているか注目する手助けになると思う。b c dの小分類と埋め込む際に用いた簡単な表現は、以下の通りである。また、具体的な【基礎日本語会話】の作業例は、表1・2で示した。

a. 事実伝達の機能

b. 知的判断を示す機能

ア. 主張（～（し）ます。）

（～（し）たいです。）

例：第15課基礎／文型（～ています。（結果））

ブラタナ：「とてもきれいな人ですね。もうけっこんしていますか。」

→（話してみたいです。）

チー　　：「いいえ、まだどくしんです。」

ブラタナ：「じゃあ、今度しょうかいしてくださいね。」

文型内機能(a)・対話機能(b)のア

イ. 評価（それは、いい。／よくない。）

例：第43課基礎／文型（～ようです。）

サイマン：「駅前に新しいレストランができましたね。」

伊藤　　：「ええ、あの店、とてもおいしいそうですよ。」

サイマン：「リーさんも、行ったらいいですよ。」

伊藤　　：「そうですか。いつも人が大勢入っているようです。」

→ (きっといい店ですよ。)

サイマン：「今度いっしょに行ってみませんか。」

文型内機能・対話機能(b)のイ・ウ

ウ. 洞察 (たぶん~だろう。)

例：第40課基礎／文型 (～ています。(状態))

チン：「あれ、おかしいですね。部屋に電気がついていましたよ。ほら。」

→ (たぶん、いるでしょう。)

リー：「あ、ほんとうですね。」

文型内機能(a)・対話機能(b)のウ

### c. 感情を表す機能

エ. 心情表明 (ほっとした。困っている。)等

例：第4課応用／文型 (～から～までです。)

ルイサ：「……私たちは、1時から3時までねます。そして、3時半からはた  
きます。」

さいとう：「いいですね。この大学のひるやすみは、11時45分から12時40分まで  
です。」

→ (短くていやです。)

ルイサ：「ええ、そうですね。55分だけです。……」

文型内機能(a)・対話機能(c)のエ

オ. 希望 (～といいなあ。)

例：第39書基礎／文型 (～かどうか)

アベベ：「実は、北海道を旅行しようと思っているんですが。」

中村：「それなら早く行ったほうがいいでしょう。」

アベベ：「そうですね。じゃあ、電話で、友だちに来月の連休に行けるかどうか  
聞きます。」

→ (行けたら、いいんですが。)

中村：「ああ、そのほうがいいですね。」

文型内機能(a)・対話機能(c)のオ

### d. 働きかけをする機能

カ. 勧告 (～したほうがいいですよ。)

例：第43課応用A／文型「～ようです。」

店員：「……ソフトレンズもできましたし、とりあつかいも簡単になりました。  
このごろはもう、コンタクトレンズを作る人の方が多いようです。」

→（コンタクトレンズにした方がいいですよ。）

客：「そうですか。じゃ、コンタクトにしてください。」

文型内機能(a)・対話機能(d)のカ

キ. 依頼（～てください。）

例：第2課基礎・文型（私のです。）

リー：「コーヒーをください。」

ウェートレス：「はい。これは、あなたのチケットですか。」

リー：「はい、私のです。」

→（コーヒーをください。）

ウェートレス：「ちょっとまってください。」

文型内機能(a)・対話機能(d)のキ

ク. 勧誘（～ませんか。）

例：第35課基礎／文型（～ながら、）

ギジェルモ：「あの花の下で、ガイドブックを見ながら、旅行の相談をしませんか。」

文型内機能不特定・対話機能(d)のク

文型内機能と対話機能の分類項目

- a. 事実を誤りなく伝える機能
- b. 知的活動の表現をする機能→ (ア.主張 イ.評価 ウ.洞察)
- c. 感情表現及び意志表明機能→ (エ.心情表明 オ.希望)
- d. 他人への働きかけ機能→ (カ.勧告 キ.依頼 ク.勧誘)

表1 分析例 その1 第33課会話33伝言 (文型・文法, 命令形)

対 話 行 動		a	b
カ リ ム	「ただいま。」		
下宿の奥さん	「おかえりなさい。」		
	あつ、さっき学校から電話がありましたよ。」	○	
	(その内容をお知らせしたいんですが。)		○-ア
カ リ ム	「なにか伝言ありますか。」	○	
	(伝言があったら、教えてください。)		
下宿の奥さん	「ええ、帰ったらすぐ電話してくれと言っていました。」	○	
	(電話をかけてください。)		
カ リ ム	「ああ、書類を出せというのでしょうか。」		○
	わかりました。		
	どうもありがとうございます。」		
下宿の奥さん	「いいえ、どういたしまして。」		

注 ( ) は対話機能の補充したもの。

(参：国研，昭和56年「初心者日本語教材の開発に関する実際の調査研究」)

機 能		話しの始まりと終わり	応 答 表 現
c	d		
	挨拶	「ただいま。」	
	挨拶 (受け)	挨拶	挨拶を受ける。 「お帰りなさい。」
	文型内機能 (事実)		「あつ。」
	対話機能 (主張)		
	文型内機能 (問い)		
○-キ	対話機能 (依頼)		
	文型内機能 (事実)		
○-キ	対話機能 (依頼)		
	文型内機能 推測		「ああ」(思い出し)
	理解の表示		
	礼を述べる。		
	礼を受ける。	「どういたしまして。」	「いいえ。」
		挨拶	



対 話 行 動		a	b
プ ジョ	「山口さん経済学のレポートは、もう終わりましたか。」 (ちょっと、お願いしたいんですが。)	○	○-ア
山 口	「いいえ、今、ちょうど、清書しているところなんです。」 (忙しくて、お引き受けできません。)	○	○ア
プ ジョ	「じゃあ、まだだいぶかかりそうですか。」	○	
山 口	「そうですねえ……、今晚中には完成できると思うんですけど……。」	○	
プ ジョ	「ああ、じゃあ、あしたの午後は、おひまですか。」 (ちょっと手伝ってください。)	○	
山 口	「ええ、午前中にレポートを出してしまえば、何も予定はありませんが、何か……。」 (私でできることなら、お手伝いします。)	○	○ア
プ ジョ	「ええ、実は、国から友だちが着いたばかりなので、学園都市の中を案内したいのですが、私もまだよくわからないものですから。」 (助けてください。)	○	
山 口	「よかったら私の車で御案内しましょうか。」	○	
プ ジョ	「すみません。いつも。 お願いしてもいいでしょうか。」	○	
山 口	「ええ、もちろん。 私もちょうどあしたはセンタービルに行きたいと思っていたところですから、いっしょに行きましょう。」	○	
プ ジョ	「どうもありがとうございます。 実は、その友だちは日本語がほとんどできないのですが……。」 ( )	○	
山 口	「それは困りましたね。 私は、英語がぜんぜんだめだし……。」	○	○
プ ジョ	「あっ、私が通訳しますから、どうぞ御心配なく。」	○	

機 能		話しの始まりと終わり	応 答 表 現
c	d		
	文型内機能 (事実) 対話機能 (主張)	「もう~しましたか。」 事実確認	
	文型内機能 (事実) 対話機能 (主張)		「いいえ。」 (断わり)
	文型内機能 ( )		「じゃあ。」
	文型内機能 (判断)		「そうですねえ。」
○キ	文型内機能 (事実) 対話機能 (依頼)		「ああ、じゃあ。」  「ええ。」
	文型内機能 (事実) 対話機能		「ええ、実は。」
○キ	文型内機能 (事実) 対話機能 (依頼)		
	文型内機能		「すみません。いつも。」
	文型内機能		「ええ、もちろん。」
○	文型内機能		「どうもありがとうございます。」
	文型内機能 (事実) 対話機能はつきりせず		
	文型内機能 (感情) 文型内機能 (事実)		「それは、困りましたね。」
○		「御心配なく。」	「あっ。」

表3

『基礎日本語会話Ⅰ・Ⅱ』分析表

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型内機能			
					a	b	c	d
1 基 応	パーティー会場	対日本人学生	自己紹介	___は、___です。	○			
		対日本人学生	自己紹介		○			
2 基 応	喫茶室 教室	対ウェイトレス	コーヒーの チケット	これはわたしの___で す。___をください。	○			
		対先生	専門	こ・そ・あ	○			
3 基 応	A 大学会館前	対見知らぬ 日本人学生	場 所	___は、どこですか。	○			
	B 食堂	対食堂の人	値 段	___は、いくらですか。	○			
	駅→	対見知らぬ人		___は、どちらですか。	○			
	留学生会館	対留学生			○			
4 基 応	宿舍の部屋	対日本人学生	明日の予定	___から___まで 勉強します。	○			
	食堂	対日本人学生	昼 休 み	___から___までです。	○			
5 基 応	教室	対留学生	交通手段	___で___へ行きます。	○			
		対日本人	交通手段	___で___から来ました。	○			
6 基	郵便局	対局員	期 間	___まで、どのくらいか かりますか。	○			

(注)○基は基礎会話、応は応用会話のことである。

○Sは、スタート、Eはエンドのことである。

○文法・交型の提示が同一課で複数ある時は、そのうちのひとつを任意に選んである。

○○○は2つの項目にまたがる意味

対 話 機 能				話し開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d		
○				— S「はじめまして。」 E「～学生です。」	
○				— S「はじめまして。」 E「研究生です。」	
			○キ	「コーヒーをくだ さい。」 — S「～をください。」 E「どうぞ。」	
○				— S「___は、あなたのですか。」 E「～さんのせんもんは___です。」	「はい、そうです。」
○				— S「すみません。」 E「どういたしまして。」	「そうですか。」
○				— S「すみません。」 E「どうもありがとうございました。」	
○				— S「すみません。」 E「どういたしまして。」	
○				— S「お国は、どちらですか。」 E「インドネシア人学です。」	
	○			— S「こんばんは___です。」 E「のんでください。」	「それは、たいへん ですね。」
			○エ	「困っています。」 S「___さん、___か。」 E「___は、___ですね。」	
	○			— S「おはようございます。」 E「朝の9時ごろです。」	「ええ、いいです ね。」
			○イ	「楽でした。」 S「いつ___ましたか。」 E「おかげさまで。」	「それはよかったです ですね。」
○				— S「すみません。」 E「～ぐらいかかります。」	「そうですね。」

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型内機能				
					a	b	c	d	
6	応	友だちの部屋	対 留 学 生	昨日のこと	__ませんか。__ましょう。				○
7	基	パーティー会場	対 先 生	料 理	__に__をVました。	○			
	応	教室	対 留 学 生	プレゼント	__は、__語で__です。 __に__をあげます。	○	○		
8	基	A 駅	対 駅 員	忘 れ 物	どんな__ですか。 __いかばんです。	○			
		B 宿 舎	対日本人学生	う わ さ	とても__な人です	○	○		
	応	日本人の家	対チューター チューターの母	食 べ 物	__は、どうですか。 __が、__ (逆接)	○	○		
9	基	教室	対 先 生	体 調	__から、(理由) __。	○			
	応	大学のキャンパス	対 留 学 生	テ ニ ス	__は、__がすき/じよ うずです。	○	○		
10	基	友だちのアパート	対日本人学生	フィリピン料理	__に__がありますか。 __は、__にあります。	○			
	応	事務室	対日本人	歯 医 者	__が、__にあります。	○			
11	基	会館ロビー	対 日 本 人	留学生の数	いくつありますか。 何人いますか。 (1単位)に(量)です。	○			
11	応		対日本人学生	大学生活	どのくらい ~でしょう。(推測)	○			
12	基	キャンパス	対日本人学生	スケジュール の打合わせ	AとBとどちらが__ Aのほうが__	○	○		

対 話 機 能					話しを開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d	埋め込み補充内容		
			○→	—	S 「きのう、何をしましたか。」 E 「ええ、__ましょう。」	「そうですね。」 (得意になる。)
○				—	S 「__た。__てくださいね。」 E 「__てくださいね。」	「そうですね。」
	○ア			—	S 「__ですね。__か。」 E 「__がありません。」	「そうですね。」
			○→	「捜してください。」	S 「すみません。」 E 「おねがいします。」	
	○エ			「うれしいです。」	S 「~だれですか。」 E 「もうわすれました。」	「いいですね。」
○	○イ			—	S 「はじめまして。」 E 「~くださいね。」	
			○→	「許してください。」	S 「どうして__ましたか。」 E 「__は、__ですね。」	「それはいけませんね。」 「それはよかったですね。」
	○→			①「行きたくありません。」 ②「心配しないで。」	S 「~をしませんか。」 E 「わかりました。」	「ええ、そうですね。」
			○→	「買ってきてください。」 「使ってください。」	S 「~くださいませんか。」 E 「はい、わかりました。」	
			○カ	「そこに行ったほうがいいですよ。」	S 「どうしたんですか。」 E 「いいえどういたしまして。」	「さあ、よくわかりません。」
○				—	S 「何人いますか。」 E 「まだ、9字だけです。」	「ずいぶん多いですね。」
○				—		
○				—	S 「~が何人いますか。」 E 「~は、たいへんですよ。」	
	○→			—	S 「いい天気ですね。」 E 「それでは、__してくださいね。」	「それは大変ですね。」
	○→			—		

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型内機能			
					a	b	c	d
12	応 A 図書館の 談話室 B バスの 停留所	対日本人学生	映 画 スポーツ の 試合	(基礎会話に同じ) __たいです。		○	○	
13	基 宿舎の階段 テ パー ト 町のとおり 応 大学会館	対留学生	時 計 図 書 館	__がほしい。 __たい。 (基礎会話に同じ)		○	○	
14	基 自動車屋 応 松見公園	対店員	自 動 車 写 真	__てください。 __てみてください __ています。(進行)		○		○ ○
15	基 停 留 所 応 キャンパス	対留学生	女 の 人 ス キー の 準 備	__ています。(結果) __ても、いいですか。	○		○	
16	基 大学事務室 応 日 本 人 宅	対事務の人	タ イ プ ライ ター おみやげ	__ないでください __てから, Ady. (に/く)なりません。		○		○
17	基 日本人7パート 応 研 究 室	対日本人学生	け が 入 院	__なければなりません。 (基礎と同じ)		○		○
18	基 A 電 話 B 電 話	対友だちの 奥さん	友だちの 所 在 先生の所 在	V(辞書形)まえに, 敬語 おっしやる おりません		○		

対 話 機 能					話しを開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d	埋め込み補充内容		
	○-ア			—	S 「～は、いかがですか。」 E 「__です。__から。」 S 「～がありましたか。」 E 「来年はかちたいです。」	「それは残念でし たね。」
	○ア	○		—	S 「__さん、どちらへ。」 E 「__ましょう。」	「じゃあ。」 「ええ。」
	○ア			—	S 「__さん、どこへ行きますか。」 E 「どうもすみません。」	
			キ	—	S 「いらっしゃいませ。」 E 「ではこれをお願いします。」	「これはいいですね。」
			○-エ	「おそいですね。」	S 「きてください。」 E 「～がついています。」	「ああ__ました よ。」
	-ア			「知り合いになり たいです。」	S 「__を知っていますか。」 E 「～てくださいね。」	「そうですね。」
	○-イ			—	S 「__さん、どうしましたか。」 E 「__どうぞ、よろしく。」	「それじゃあ。」
			○-キ	—	S 「すみません。」 E 「__ないでくださいね。」	
			○-キ	「安心して下さい。」 +たいで使われている。	S 「ありがとうございました。」 E 「じょうずになりたいです。」	「そうですね。」
	○-イ			—	S 「ごめんください。」 E 「__てくださいね。」	「しつれいします。」 「それはよかったですね。」
	○			「だから来られません。」	S 「__さんは、休みます。」 E 「では、しつれいします。」	「それで、どうした んですか。」
	○-ア			—	S 「もしもし。」 E 「さよなら。」	
	○			—	S 「もしもし。」 E 「どうもしつれいしました。」	「そうですね。」 「それはさんねんです。」

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型内機能			
					a	b	c	d
18	応 電 話	対チュータの母	チュータの所在	(基礎と同じ)	○	○		
19	基 地下鉄の駅 応 宿舎の売店	対日本人 対留学生	再 会 靴	V(た形)たことがあります。 V(る/ない)ほうがいい。 (基礎と同じ) V-たことはありません	○			○-カ
20	基 (5課の口語体) 教 室 応 A (5課) B (19課) の口語体	対留学生 対日本人 対留学生	交通手段 交通手段 靴	___で___へ行きます。 V-たことはありません。 V-(る/ない)ほうがいい。	○	○		○-カ
21	基 応	対日本人学生 対留学生	日 本 コンピュ ー ター	と(引用)言います 思います。 と(引用)言います と思います。	○		○	
22	基 応 A B	対留学生 対留学生 対留学生	道 順 道 順 道 順	___と(条件), ___と(条件), ___と(条件),	○	○	○	
23	基 教 室 応	対先生 対留学生	研修旅行 写真	連体修飾 VるNはどこですか。 VなければならないN VたN	○		○	

対 話 機 能					話しの開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d	埋め込み補充内容		
	○-ア				S 「もしもし。」 E 「しつれいします。」	「もうしわけありませんね。」 「よろしくおっしゃってくださ い。」
			○-キ	「思い出してください。」	S 「あのう、___か。」 E 「はい、ありがとうございます。」	「ああ、あの___で すか。」
			○-カ	「心配だわ。」	S 「～ことがありますか。」 E 「___から、いいですよ。」	「それではお願いしま す。」
	○				5課に同じ	「うん。」
			○-エ	「心配だわ。」	19課に同じ	「そう。」
			○-カ			
	○-イ			「あなたもそう思いま すか。」	S 「～どう思いますか。」 E 「そうしたいと思います。」 S 「～どう思いますか。」 E 「そうしたいと思います。」	「まだよくわかり ませんか。」
	○			—	S 「どうやって行きますか。」 E 「いいえ、どういたしまして。」	「こうさてんです ね。」(確認)
	○			—	S 「行ったことがありますか。」 E 「すぐわかると思います。」	
	○			—	S 「どうやっていくの。」 E 「ええ、いいわよ。」	「ええ、いいわよ。」
					S 「何か質問ありますか。」 E 「いいえ、ありません。」	「あ、モースンさん、 どうぞ。」
			○-キ	「持ってきてくだ さい。」	S 「だれがとったものですか。」 E 「まあ、しつれいね。」	「えっ、どの人です か。」

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型内機能			
					a	b	c	d
24	基 会 場 応 先生の家	対日本人学生	日本語の勉強	VたひVたり ことがたくさんあります。		○		
		対 先生 先生の奥様	趣 味	__は、Vことです。 __ことがすきです。	○		○	
25	基 研 究 室 応 教 室	対 先生	ハイキング	__ても、 __たら、				
		対 先生	かぶきの切符	__たら、どうですか。				○- カ
26	基 応 新幹線の中	対日本人学生	タ ン ゴ	可能性		○		
		対留学生	ふ じ 山	自発	○			
27	基 応 日本人宅	対日本人	学 校	おVになる Vてくださいます。 Vてくださいませんか。 Vてあげます。	○ ○			○
						○		
28								
29	ま と め							
30								
31	基 旅 行 セ ン タ ー 応 ラ ウ ン ジ	対旅行会社 の社員	切符の 手配	__ば、(~たいんですが) Nなら、(~ます)				
		対日本人学生	展 望 塔	Nなら、(~ます) __ば、(~見えます)				

対 話 機 能					話し開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d	埋め込み補充内容		
	○			— 「まだ、へたです。」	S 「日本語を勉強していますか。」 E 「ええ、がんばります。」	「たあ、~てくださ いね。」
○				— —	S 「何をすることが好きですか。」 E 「~食べてくださいね。」	
○				— —	S 「行きませんか。」 E 「ごんねんですね。」	「わあ。」
			○- カ	— —	S 「どうしたらいいですか。」 E 「わかりました。」	
	○- ア			— —	S 「~来られますか。」 E 「よろしく願います。」	「ええ。」  「ほら、あそこよ。」
				○- エ 「すばらしいわ ね。」	S 「どうしたの。」 E 「ほんとうね。」	
	○- ア			「飲みたいですか。」 「楽しいです。」	S 「いらっしゃいましたか。」 E 「ええ、ぜひ。」	「そうでしたか。」
			○- キ	— —	S 「どうぞ。あ、ワヒットくん。」 E 「ええ、とても楽しみです。」	
	○- ア			「+しよう」とい う形で本文中に使 われている。		
	○- ア			— —	S 「いらっしゃいませ。」 E 「それなら、朝はやく行きます。」	「あのう。」
○ ○				— —	S 「とてもにぎやかでしたよ。」 E 「来ると思います。」	

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型内機能			
					a	b	c	d
32	基 喫 茶 店 応	対日本人学生	夏休みの 計 画 計 画	つもり, 意向形 意向形		○ ○ ○		
33	基 応 A 公 園  B ラウンジ	対日本人 対日本人学生	伝 言 立てふだ  手 紙	命令形 命令形  				○ ○ ○
34	基 キャンパス 応 バ ス 停	対留 学 生 対留 学 生	病 気 さ い ふ	ーんです。 さいふ		○ ○		
35	基 池 応 ロ ビ ー	対日本人学生 対日本人学生	旅 行 の 相 談  ウィーク エ ン ド	ーし、ーし ながら  ーし、ーし ながら				
36	基 売 店 応 駅	対日本人学生 対留 学 生	欠 席 待ち合わせ	ーて(原因) ので て, (原因) Nで,		○ ○		
37	基 バスの中 応 バスの中	対日本人 対日本人学生	工 事 コ ン パ	ようになります ようにします ように, ようにしています		○ ○		

対 話 機 能					話しの開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d	埋め込み補充内容		
	○ア ○ア ○ア			—— —— ——	S 「何をするつもりですか。」 E 「ほくも、そうしようかな。」 S 「とてもよかったですよ。」 E 「はい、そうするつもりです。」	
	○ ○ ○			「+と書いています。」と いう形で使われている。  「+と書いています。」で 使われている。	S 「ただいま。」 E 「いいえ。どういたしまして。」 S 「休みましょうか。」 E 「注意がありますよ。」 S 「あまり元気がないわね。」 E 「手紙を書くわ。」	「ああ。」(思い出し) 「あっ。」(発見) 「そう。」
	○ーア ○ーア				S 「どこへ行くんですか。」 E 「ええ、困っています。」 S 「どこへ行くんですか。」 E 「届けてくれたんです。」	「そういえば。」
	○ ○		○ー ○ーク	「+ませんか。」で 使われている。	S 「とてもきれいですね。」 E 「ああ、そのほうがいいですね。」  S 「何をしていますか。」 E 「楽しいですよ。」	「ああそのほうが いいですね。」
	○ ○			○ーキ 「どうもすみません。」	S 「どうしたんですか。」 E 「すみませんでした。」 S 「遅いですね。」 E 「動けませんよ。」	「ああ、これがーで すか。」
	○ーウ ○ーイ			○ーキ 「ようにしてくださ い。」で使われている。  「それが一番いい です。」	S 「何ですか。」 E 「あっ、どうもすみません。」  S 「おはよう。」 E 「残念ですが……。」	「おや。」 「もし、もし。」 「いやあ、じつは。」

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型機能			
					a	b	c	d
38	基 研 究 室	対 先 生	どろぼう	受身形	○			
38	応 教 室	対 留 学 生	コンピューター	受身 めいわく受身			○	
39	基 ラウンジ	対日本人学生	値上がり	～かどうか ～か				
	応 管 理 室	管 理 人	け が	～か				
40	基 宿 舎 の 前	対 留 学 生	人の所在	～てしまいます ～ています(状態)	○	○		
	応 研 究 室	対日本人学生	8ミリ映画	～ています(状態)	○			
41	基	対日本人学生	引っ越し	～てあります ～ておきます	○			
	応 中 央 図 書 館	対日本人学生	レポ-ト	～てあります ～てみます ～ておきます	○	○		
42	基 バ ス	対 留 学 生	お 祝 い	Vの(形式名詞)～のは ～のに ～の(を)				
	応							
43	基 電 車 の 中	対日本人学生	レストラン	そうです(伝聞) らしいです ようです	○	○		

対 話 機 能				話しを開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d		
		○-エ	「困ったものです。」	S 「待っていたんですよ。」 E 「気をおとさないでください。」	「で、～か。」
		○-エ	「驚いたね。」	S 「どこへ行ったの。」	「へえ。」(驚き)
		○-エ	「困ったんだ。」	E 「大変なんだね。」	
	○-ウ		—	S 「～と言っていましたよ。」	「さあ、～わかり
	○-オ		「いけるといいなあ。」	E 「そのほうがいいですね。」	ません。」
		○-カ	「行ったほうがいい。」	S 「～かわかりますか。」	「さあ。」
				E 「どうもありがとうございました。」	
	○-エ		「困っています。」	S 「どこへ行くんですか。」	
	○-ウ		「いるだろうと思います。」	E 「ええ、そうします。」	「まあ。」
○			—	S 「これは、いつとったの。」	「ほら、見て。」
				E 「きれいに、とってあげるから。」	
○			—	S 「本当ですか。」	
		○-エ	「+たほうがいいでしょう。」	E 「してみます。」	
			う。」で使われている。		
○	○-ア			S 「何を採してるの。」	「すみません、い
	○-ア		「+てみましょうか。」	E 「聞いてきます。」	つも。」
		○-カ	使われている。 「+ておいたほうがいい」で 使われている。		
		○-ク	「ききましょう。」	S 「～のを知っていますか。」	「ええ、ぜひ。」
	○-イ			E 「じゃ、～してみましょう。」	
○				S 「～のを知ってる。」	「さあ、どうか
				E 「～てみたらどうだろう。」	な。」
○				S 「～ができましたね。」	
	○-ウ			E 「行きましょうか。」	
	○-イ				



課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型機能			
					a	b	c	d
43 応	A めがね屋	対 店 員	め が ね	そうです(伝聞 らしいです ようです	○	○		
	B キャンパス	対日本人学生	読	らしいです ようです	○	○		
44 基 応	文房具売場	対 店 員	ペ ン	V やすいです V にくいです V すぎます		○		
	バ ス 停	対日本人学生	キャッシ カ ー ド	V すぎて、 ~そうです。(様能)		○		
45 基 応	研 究 室	対日本人学生	人の所在	V (る/ている/た)ところ V ~たばかり はずです。	○	○		
	友人の部屋	対 日 本 人	大学案内	V (~ている)ところ	○			
46 基 応	事 務 室	対日本人学生	パーティ の 準 備	使役形 ~させてください ~させてもらいます		○		○
	大学会館の ロ ビ ー	対日本人学生	大 学 生	~させると、 ~されて、。		○		○
47 基 応	宿舎のせんとく場	対日本人学生	歌	~てやります。 ~てくれます。 ~てもらいたす。	○	○		
		対日本人学生	送 別 会	~ていただけませんか。 ~てやります。	○			○

対 話 機 能				話し開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d		
○	○-イ		○-カ	「~になさいますか。」 E 「どうぞ、こちらへ。」	「では、どうぞ、こちらへ。」
	○-ウ		○-ウ	「何を読んでいるんですか。」 E 「ええ、そうします。」	
	○-イ			S 「~をおさがしですか。」 E 「~くださいませ。」	
	○-イ		○-イ		
	○-イ		○-ア	「銀行へ行きたいの。」 S 「どこへ行くの。」 E 「そうかしら。」	「あれっ。(驚き)」
○	○			S 「~さん、いますか。」 E 「どういたしまして。」	
	○-ウ		○-ア	「引き受けたくないです。」 S 「もう、終わりましたか。」 E 「御心配なく。」	ええ、もちろん。」
	○-ア		○-キ	S 「もう、できましたか。」 E 「手伝うつもりなんです。」	
○	○-ア			S 「どう思いますか。」 E 「違いますよね。」	「まず、~ですね。」 「いや、~ですよ。」
○	○-ア			S 「だれに、~たんですか。」 E 「~てくださいね。」	「おや。」
○			○-キ	S 「ありがとうございました。」 E 「~てやりたいです。」	
	○-ア			E 「ありがとうございます。」	

課	場 所	対人関係	話 題	文 法・文 型	文型機能			
					a	b	c	d
48	基 会 義 室 応 研 究 室	対日本人学生 対 先 生	面 接 挨 拶	おVします。		○		
				おVください。 Vなさいます。				○

対 話 機 能				話し開始と終了形式	主な応答表現
a	b	c	d		
	○-ア			S 「次の方、どうぞ。」 E 「～ください。」	「あっ、どうありがとございます。」
○			○-キ	S 「～ください。」 E 「お元気で。」	

### Ⅲ. 分析表の考察

#### ①場所・対人関係・話題に関して

まず場所に関して言えることは、大学のキャンパス内や宿舎でのものが多いことである。無論、生活の大半は、学園内で過ごすのではあるが、桜町役場、NTTなどの場があってもいいと思う。いずれにせよ留学生の生活の実態を知る意味で実施調査を行なう必要がある。ただし、ここで明確にしておきたいことは、この実施調査によって得られた留学生の行動範囲の中から、直接、場所別に課を立てて、教科書としてしまうことは、必ずしも適切ではないということである。これは、あくまでも、「ところ」としての場所に誘導されたものである。一般に、「場面」という言葉で、「場所」そのものを指すことがよくあるが、場所の多様性と場面の多様性とは、異なる。場面というのは、そのコミュニケーションの目的と、相手に対して好意を持っているのか、何らかの敵意を抱いているのかといった人間の心情を形成している要素まで拡大して考えるべきものだと思う。つまり、銀行や旅行センター等学園外の場所を多く教科書に盛り込んでも、場所以外の場面を構成する要素が同じならば、幅広いコミュニケーションの訓練になるとはいえないのではないか。例えば、銀行でも旅行センターでも、相手は、職業的立場から半ば義務で好意的に留学生に接し、コミュニケーションの目的は、書類の書き込み等などによる事務的処理であるということには、変わりはない。筆者がAコースを指導した私見ではあるが、たとえ教室という同じ場所であっても、相手が親しい友人とあまり親しくない友人とか、同一人物の田中さんでも、機嫌のいい時の田中さんと話す時と、そうでない時というような設定に配慮した方が、コミュニケーションの訓練としては、より適切であると考えられる。したがって、本教科書の場所に多様性がないことが、直接的に内容の幅がないことを意味することにはならないが、話題の中に警察へ行った話や病院の話が出ているのに、その現場が出てこないもので、学習者がもの足りない気持を持つことは確かであろう。

「場所」で見られたのと同様の傾向が対人関係についてもある。というのは、ある一定の顔見知りの人間関係内での設定が多く、社会的「立場」に立っている人との会話、例えば、医師・電話交換手との会話が少ない。

この場所・対人関係・話題に関して考えられるひとつのテーマは、変化 (variety) と頻度 (frequency) の問題である。留学生が絶対的に日本語でコミュニケーションをしなければならない場合というのは、役所などで事務手続きを行なう場合である。この点から、ある程度の場の変化 (variety) は、教材の中にも取り入れられるべきである。しかし、そ

の一方で、留学生が日常よく接するのは、研究室の日本人や指導教官、また共通言語を持たない外の国からの留学生であるのも確かで、この点からは、どんな種類の会話をよくするかという頻度 (frequency) ということが重要視されなければならない。偶然乗り合わせたエレベーターの中の会話のやりとりとか、日本人の風俗習慣について留学生同士で感想を述べ合うとかの機会は、日常生活でもしばしばあるだろう。この変化 (variety) と頻度 (frequency) の両者のバランスを、教科書全体の中で、うまく取ることが大切だ。

②文法・文型、文型内機能、対話機能

下の表は、表3の分析表から文型内機能と対話機能の内訳を数で表わしたものである。

表4

機能の種類	文型内機能		対話機能	
a. 事実を誤りなく伝える	67	49%	50	31%
b. 知的活動の表現をする	53	39	62	39
c. 感情表現	3	2	17	11
d. 他人への働きかけをする	14	10	30	19
計	137	100	159	100

注) ・二項目にまたがるものは、両方とも含まれている。

・いずれにもなるものは、含まれていない。

・文型内機能欄の合計数と対話機能欄の合計数が異なるのは、文型内機能が定まらなかったものが、その会話の中で、ある対話機能を持っているからである。

文型内機能の a. 事実を誤りなく伝える機能は、対話機能になると49%→31%と減少している。その一方で、c. 感情表現と d. 他人への働きかけ機能は、増加している。つまり、事実を述べると同時に、ある感情を伝えたり、他人へ何らかの働きかけをしていることが、人為的に作成した会話の中からもわかる。しかし、31%という割合や内容が、はたしてこれで妥当であるのかという問題が残る。そこで、次に、実際に行われた会話の対話機能を調べてみた。それが、表5・6・7である。

表5 会話例その1、表6 会話例その2は、特定の目的を含んだ会話ではない。また、話者の間柄としては、表5の会話例その1は、YとAは初対面であり、表6 会話例その2では、親しい友人同士である。表7 会話例その3は、値段を交渉するという目的で行われた会話で、前者は、店の主人と客という関係である。

三つの会話を考察して全体的に言えることは、文型内機能では、a. 事実伝達機能でも、対話機能ではかなりのものが、b. の主張や評価、d. の依頼などに転換しているということである。会話例その1は、会話の目的も特になく、話者同士も親しくないのに、含意を含んだ会話が行われにくいいためか、機能間の転換は、比較的少ない。また、発話を途中で切ってしまう事も多い。しかし、これとは対象的に、会話例その2、その3では、個々の発話には、はっきりとした対話機能が内包されている。特に会話例その3では、小銭の話や帰る手段について話してはいるものの、結局は、客は値段をまけろと要求し、主人は、それはできないが買ってくれと主張している。発話の形態も自分の発話の一部の繰り返しが多い。以上のように、文型内機能が四つのうちのどの対話機能に転換するのかというのは、話者の人間関係や会話の目的によって異なるが、総合的に判断すると、現実の生活では、表4の対話機能のa. 事実伝達の割合(31%)は、もっと低くなるのではないかと予想される。

さて、表3の分析表に戻って、四つの機能の分布のし方を分析表で考察してみたい。初級初期には、どうしてもa. 事実を誤りなく伝える機能が集中してしまう傾向がある。これは、文法をより体系的に教えようとする意向や教室内でとられる教授法によってさらにその傾向に拍車がかけられていると思われる点がある。例えば、一番簡単な自己表現として、「～がすきです。／きらいです。」が、上げられるが、「基礎日本語会話」では、九課に提示されている。ここでは、同一課で「すきな+名詞」、「きらいな+名詞」、の名詞を修飾する「な-形容詞」の導入も行われている。一般的に他の教科書でも大体同じような紹介のされ方をしているが、もし、「～がすきです／きらいです」の形だけなら、もっと早い時期に提示できるだろう。もっとも、この場合は、どこの課で、形態的な補則説明を行うか、調整する必要があるが、いずれにせよ文法的形態の整然さだけを考慮するのではなく、その表現の必要性の程度をも同じに考えるべきだと思う。また、教授法との関連としては、直接法という方法を採用することを前提とすると、目で見て理解させやすいもの、例えば、位置や比較の表現などが、初期に提示されやすくなる。直接法の効果が高いことは、多くの人によって主張されているが、採用される教授法が、学習者の要求を無視したシラバスを組み立てる結果になるとしたら、それは本末転倒だろう。『An Introduction to Modern Japanese』（水谷、1977）では、第九課で、「～とおもいました。」、第十一課で、「～したほうがいい。」の表現が提示されている。これらは、全体が30課構成ではあるものの、「基礎日本語会話」よりコース全体の中で提示時期が早いと言える。

「～とおもいました。」は、b. 知的活動を表わす機能だし、「～したほうがいい。」は d. 他人への働きかけを表わす機能で、いずれも、a. の事実伝達の機能とは異なる。この教科書は、グラマティカル・シラバスよりは、シチュエーション・シラバスに近いもので自習書としての使用も考慮して英語を媒介語として使用している。

このように二冊の教科書の構成と内容を比較すると、シラバスの変更や教室内での教授法の変更によって、指導したい表現機能を優先的に教科書に盛り込むことが可能であることがわかる。

### ③会話の開始と終了形式

この項目を一見して、非常に類似したパターンが多いということがわかる。例えば、挨拶から始まって、「～してくださいね。」という言い回しで終る型、疑問詞を含んだ疑問文で始まり、礼や「～ですね。」と締めくくる型などである。また、42課などのように、同一課の基礎会話も応用会話も、同じ開始と終了形式となっている課も複数ある。話をいかに始め、いかに終えるかという技術は、より多くの表現を知ることと同様に重要である。したがって、文法項目や機能項目と同様に、学習者に修得してほしい話の始め方と終了のし方を整理する必要があると思う。おそらく、実際には、話し手同士の人間関係や話題などによってこの話の開始と終了形式は非常に多様なのではないのだろうか。【An Introduction to Modern Japanese】(水谷, 1977)の中では、「きのうは、よくふりましたね。」(第5課)、「きのうは、いやなことばかりだったよ」(第24課)、「東京の町は学生が多いですね。」(第26課)といった批評をしながら話題を提供していく始め方があるが、『基礎日本語会話』の中でそれに該当するのは、約80の会話のうち、35課「花がきれいですね。」と、43課「レストランができましたね。」の2つの基礎会話で、残りの大半は、疑問詞を含む質問形式である。終り方は始め方ほど『基礎日本語会話』でも固定化はされていないが会話の終らせ方で考えられることは、どの課の会話もすべて、ひとつのまとまりをつけて終らせる必要はないのではないかという事である。明らかに話の途中である所で会話を終了させているものがあつた方が、学習者は、会話の終らせ方を考える練習にもなるだろう。

### ④応答表現

ここで言う応答表現とは、問いかけに対する返事とは別に相手の発話に対する反応のし方を対象とするものである。これには、驚きの表現から相手の発話内容の確認作業までさまざまなものが含まれる。この項目の提示事項も会話作成前に設定したわけではないのでかなり固定化されている恐れがある。例えば、「そうですか。」の乱用である。

本来、相手を前にして音声表現でなされる会話を文字化して書き、作成時にその会話を読むことによって確認するという作業過程を採ると曖昧な音声やノンバーバルな部分で処理される応答表現が、よりはっきりとした表現を使って書き表わされる事がある。『基礎日本語会話』の「そうですか。」も、このような原因によって、必要以上に使われてしまったのではないだろうか。

表8で『基礎日本語会話』で使われている「そうですか。」の例をいくつか上げてみた。

第31課の応用会話の「そうですか。」は、まったくの不適當とは言えないが、「へえ。」で十分である。

第40課の基礎会話の場合は、「あっ、それなら、…」という応答のほうが自然ではないだろうか。

第41課・43課の基礎会話の場合は妥当な使用例と思える。「そうですか。」と言う時は、かなりの間を取る事なので、「そうですか。で、～」とか「そうですか。じゃ、～」というように、次に新たな展開があるものではないだろうか。無論、「そうですか。」はこのような場合だけに使用されるわけではなく、大きな驚き、疑いなどを表現する時にも使われる。しかし、現教科書には、この種の用いられ方は、あまりとり入れられていない。

表5 実際の会話例 その1 (『言語生活』 No.274 1974, 4月, 62)

会話の種類 …… 目的のない会話  
 対人関係 …… A, Bは学生時代からのごく親しい仲間  
 Yは, Bの婚約者である。結婚式の近いBが,  
 婚約者をA, に紹介し, 一同, 少々, 酒を飲んで  
 いる。  
 二次会に行く途中の車の中での会話。

対 話 行 動	
A 1	「でも, 飲兵衛てのはどうですか, みてて。 飲まない人からみると, あまり……」 (いいもんじゃないでしょう。)
Y 1	「いま, 別にそんなことないです。」
A 2	「お父さん どうなんですか。」
Y 2	「うちの父ですか。」
A 3	「ええ。」
Y 3	「全然だめなんです。」
B 1	「におい かぐだけで……」
Y 4	「でも, 飲めない人からみると, 羨ましいですね。 飲めたらねえ。 (いいですね。) お酒飲める人って, ほんとうに楽しそうで。 (いいですね。)」

( ) 内は, 補足埋め込み部分

機 能								
文 型 内 機 能				対 話 機 能				
a	b	c	d	a	b	c	d	
	○			評価の問いかけ		○		洞察
		○		評価		○		評価
○				事実の問いかけ 確認	○			事実の問いかけ
				_____				
○				事実報告	○			事実報告
○				事実確認	○			事実確認
			○	心情表明			○	心情表明
				_____				
○				事実			○	希望
						○		評価



表6 実際の会話例 その2 (『言語生活』 No.208 1969, 1月, 37)

会話の種類 …… 目的のない会話

対人関係 …… 女子高校生の友人同士

話 題 …… 電車の中で会った人の名前を調べること

対 話 行 動	
	⋮ ⋮ 省 略
A	「ンもう、だれでもいいから、男の子でもいいよ。」 (写真を借りてちょうだいよ。)
B	「ンーン、男の子いないもん。」 (男の子からは、借りられないわよ。)
A	「おねがい、わたしもう…。ちょっと、サア、住所でてないのかあ。」 (住所が知りたいのよ。)
B	「でてるよ。」
A	「でてる。」
B	「で、名前わかってる。」 (名前がわかっているれば、住所がわかると思うわ。)
A	「フフフッ!今、調べてるんだ。」 (近いうちに、きっと わかると思う。)
B	「なあんて、名前かな。」
A	「ん、テツのところまで調べさしてる。」 (きっと、すぐに わかると思う。)
B	「ふーん。」

( ) 内は、補足埋め込み部分

機 能							
文 型 内 機 能				対 話 機 能			
a	b	c	d	a	b	c	d
	○			主張			○ 依頼
○				事実			主張
○				事実		○	主張
				_____			
				_____			
○				事実の問いかけ		○	洞察
○				事実報告		○	洞察
				_____			
○				事実報告		○	洞察

表7 実際の会話例 その3 (『言語生活』 No.288, 1975, 9月, 92)

会話の種類 …… 値段の交渉を目的とした会話

対人関係 …… 若い女性(客)と主人

対 話 行 動	
主	「2500円!! 2500!!」
客	「…もうちょっと」
主	「もうちょっと? アー…2000…300円!!」
客	「もうひとこえ。アッハハハ、もうひとこえ..」
主	「アー (ため息)」
客	「三百円札なんてお札, 持ってないんだもんね。」 (だから, 2000円ちょうどにまけてよ.)
主	「おつりはあるんだよねえ。いくらでもあるんだ, おつりは。 おつりは, あるんだよねえ。」 (まけられないよ。)
客	「だってね。電車で持ってくるの, 大変なんだもんね, 電車で, 今から」 (買ってほしかったら, まけろよ。)
主	「だってね, これが2000円なんだよ, 旦那。 アッ, 旦那じゃねえや, こっちの旦那じゃなかった。 こっちの旦那じゃ…」 (まけられないよ。)
客	「アハハ, もうだめ, もうだめ。」

( ) 内は, 補足埋め込み部分

機 能							
文 型 内 機 能				対 話 機 能			
a	b	c	d	a	b	c	d
○				事実通達			
							○ 依頼
				事実通達			
					○		主張
				事業通達			
							○ 依頼
				事実通達			
					○		主張
	○			評価			

表 8

応答表現 「そうですか。」

第31課 応 用	<p>A : 「ああ、展望塔でしょう。 あの公園のシンボルです。 100円はらえば、エレベータでのぼれますよ。」</p> <p>B : 「<u>そうですか。</u> ほくは、まだ一度ものぼったことはありません。」</p>
第40課 期 礎	<p>A : 「タイプライターがこわれてしまったので、友だちに借りに行こうと思 います。」</p> <p>B : 「<u>そうですか。</u> 101号室のジョンソンさんも、タイプライターを持っていますよ。」</p>
第41課 期 礎	<p>A : 「春休みに引っ越しすると聞きましたけど、本当ですか。」</p> <p>B : 「ええ、大学の近くのアパートに移るつもりなんです。」</p> <p>A : 「<u>そうですか。</u> で、部屋は、もう見つけてあるんですか。」</p>
第43課	<p>A : 「ソフトレンズもできました、とりあつかいも簡単になりました。 このごろは、もうコンタクトを作る人の方が多いようです。」</p> <p>B : 「<u>そうですか。</u> じゃ、コンタクトにしてください。」</p>

#### Ⅳ. 望ましい会話教材の作成に向けて

この章では、第三章の考察の結果を参考にして、望ましい初級会話教材のあり方を考えてみたい。

分析表では、“場所”“対人関係”“話題”“文法・文型”“機能（文型内機能・対話機能）”“話の開始と終了の形式”“主な応答表現”と七項目に渡って考察したが、これらは、それぞれ会話を構成する要素として重要なものである。従って、このうちのひとつの項目、例えば、“文法・文型”が、すべての会話の主軸になるものではないと思う。まず、七つの項目のすべてにおいて、シラバスが作成され、初級会話教材に盛り込みたい学習項目を多角的に確認する必要があるだろう。その後で、個々の会話を作りながら、項目間の調整が行なわれるようにしたらどうだろうか。

七項目すべて同じように扱うことが、無理な場合に、優先すべき項目は、コミュニケーションの目的、すなわち、機能に当たる部分だろう。あるコミュニケーションの目的を果たすには、どのような談話の流れが考えられるか、どのような機能による構成が一般的かといった会話の骨子ともなるべきものを考えたらいと思う。例えば、人から物を貸してもらおうという目的を設定するとする。そこで考えられる会話の骨子は、<sup>A</sup>要求→<sup>B</sup>拒絶→<sup>A</sup>交渉→<sup>B</sup>条件付き受諾といった具合である。このような会話の展開のパターンを教材全体の中で多種多様に揃えていったらどうであろうか。

この会話の展開のパターンを揃える際に、十分考慮したい事は、学習者の置かれている外的環境だけではなく内的環境、つまり心的要因をも含めて考えることである。上記の会話の骨子で言えば、学習者であるAという人間が相手Bに拒絶される場面が重要なのである。ここで、不満に思いながらも口を閉ざしてしまうのではなく、拙い日本語でも何とかそういう状況を打開する手立てを教材内で示さなければならないと思う。具体例を示すと次のような場面が想定される。

例：留学生Aは日本人Bと共同実験をしている。実験の進め方についてAは、ある提案をするが、Bは、これに同意しない。そこで、Aは、Bのやり方の良さを認めながらも、Bに再考を促す。

上の例の中で提示できる表現

提案…「～たらどう（ですか）。」

反対…「正確に～できるとは思えないな。」

譲歩…「確かに、～は、いいかもしれないけど。」

再提案…「～てみるのもいいんじゃないかな。」

心的要因を含めて考えるということは、会話の中の学習者の立場である人間の心理状態をはっきり決めておくということである。

現行の教科書の問題がどうしても無難なもの例えば、人のうわさをすれば、ほめるだけであり、何か試みれば成功ばかりで失敗もなく、従って反省するという行為がない等～になってしまうのは、このコミュニケーションの目的の設定が不明確だからである。もし、「批判」とか「悔恨」とかと教育目的を定めておけば、これらの話題も作成しやすくなるだろう。

以上の観点から考えると従来の教科書に比べて“文法・文型”の重要度は、かなり低くなるが、現在の“文法・文型”の学習項目の量に問題がないわけではない。実際に教室で指導していると、現行の“文法・文型”の量に不足を感じる時がある。つまり、初級でももっと知っておいたほうが良いと思うのである。しかし、その反面、学習者の運用能力を見ると、学習項目をもっと限定し、十分な運用練習をした方が良く感じる時もある。この二つの相反する判断は、各学習項目の目標が区別されていないことによるものだろう。聞いてわかれば良い表現と十分な口頭練習を課す表現とを、はっきり区別すべきなのである。そうすれば、学習項目の量をもう少し柔軟性を持って調整できることになる。(注5)では、このように“文法・文型”のシラバスを細部にわたって検討を加えた結果作成される会話は、どのようになるかという次のような形態が想定できる。会話の中の日本人は、話す量も多く、また内容もむずかしい事を、やや一方的に話すのに対し、学習者の立場の人間は、簡単な応答や質問をするという形である。このような形態の会話は、教師が常に相手役をするという練習形式をとるが、自然さからいうと大切であると思う。

さて、会話文を検討する上での項目は、分析表で示したが、追加すべき項目がもう一つある。それは、話しことばの特徴的な形についてである。これらは、より円滑なコミュニケーションをするためのテクニックとして指導されるべきであろう。大石初太郎氏によると以下のような項目が上げられている。(注6)

①接統詞由来の終助詞・終止文

例：「だけど、もう取る方がおもしろくて。」

②繰り返し表現としての文節または文節連結を含む文

例：「墓の中、はいったことある。お墓の。」

③後から補足する表現を含む文

例：「山開き、谷川の山開きの前」

④挿入分を含む文

例：「でも、なんかそういう材料…材料っていうのかしら、天火とかそういう物が、ずいぶんいるんじゃない。」

⑤言いなおし文

例：「あれは、どういう意味、日本語に、いやっ、日本語じゃない、東京弁に直すと。」

以上の五つのポイントのうちいずれかが、会話文中にあるかどうか調べる項目を、第八項目として、先に上げた七項目に追加するべきだろう。

以上で、『基礎日本語会話』の反省を終えるが、今後の新教材開発にむけて、まず、学習者のコースへの期待度や筑波大学内及び次の研究大学内でのコミュニケーションの実態についての調査をする必要があることを、最後に付け加えておきたい。

注)

注1 【日本語の基礎】海外技術者研修協会編

注2 シチュエーション・シラバスの教科書としては、『生活日本語』文化庁 1983が上げられる。

注3 【話しことばの文型 I】国立国語研究所 1960

注4 Van EK J A., L G Alexander & M A Fitzpatrick 1975 "Waystage English", Council of Europe, Strausbourg, (Pergamon, Oxford, 1980)

注5 埼玉大学政策科学研究科では、日本語の授業に delayed oral practice method が採用されている。この delayed oral とは、初期の3～4ヵ月は、学習者に発話を要求せずに、聴解力の養成だけをする。この方法を採用すると、初期の段階から、かなり多くの文法・文型の提示が行なえる。詳しい報告は、奥津令子氏によって『国立国語研究所 日本語教育紀要』1985に掲載されている。

注6 【話しことば論】大石初太郎 秀英出版 1971

参考文献

Finocchiaro, M. 1983 The Functional-Notional Approach from Theory to Practice  
Oxford U.P., London.

- Jones, L and von Baeyer 1983. Functions of American English Cambridge U.P.,  
New York.
- Wilkins, D A 1972 Notional Syllabus Oxford U.P., London.
- Wardhaugh R 1985 How Conversation Works. Oxford UP, London
- 島 弘巳 1985 「日本語教育における文法の役割」『国際商科大学論叢』第32号,  
p.29—42
- 堀口純子 1985 「話しことばに迫る」『応用言語学 講座1』明治書院,p 250—268
- 入谷敏男 1981 「話しことば」中央新書 633, 中央公論社
- 国立国語研究所 1983 「話しことばの文型(1)」第六版, 秀英出版
- 国際教育振興会日本語教員養成講座準備研究会, 1986 資料プリント「3つのシラバスの  
比較」
- 大石初太郎 1971 「話しことば論」秀英出版
- 奥津令子 1986 「聴解を優先する教授法の応用」『国立国語研究所 日本語教育紀要』
- 田中望, 奥津令子, 小田切由香子 1985 「Council of Europe の言語教育プログラム」  
『日本語教育』第55号p 31—47